

なぜ安吾の“墮落”に魅せられるのか？

——坂口安吾『白痴』について——

セリンジャー(朝さろん)

“めいめいが各自の独自のそして誠実な生活をもとめることが人生の目的でなくて、他の何物が人生の目的だらうか。私はたゞ、私自身として、生きたいだけだ。”¹

はじめに

「白痴」という作品はもとより、坂口安吾という作家自体が、その強烈な存在感と思想によって熱心なファンを今なお獲得している。安吾の影響を公言している作家・批評家は非常に多く、また近年も『新・墮落論—我欲と天罰』²というタイトルを冠した本が出るほど「墮落論」という作品（の少なくとも存在）は人口に膾炙している。

それ以前から文壇に登場はしていたが、戦後すぐの昭和 21（1946）年に相次いで発表された「墮落論」と「白痴」によって、作家・坂口安吾は戦後日本のヴィジョナリーとして一躍注目を集めることとなった。しかし戦後 70 年以上を経てなおこれだけの存在感を残しているのは、単に巨大なインパクトを与えたり、流行になったからのみではない。「墮落論」や「白痴」といった作品（そしてその他の作品群）には、安吾的な墮落の精神や生への渴望が地下水脈のように流れており、その命脈が今も持続し、読者ひとりひとりに内省を迫ってくるが故である。

安吾が「墮落論」や「白痴」で提起した〈生きよ。墮ちよ。〉という思想が、現在どのように展開されているか——を考える前に、まずはこの〈生きよ。墮ちよ。〉という思想がいったいどのようなものなのか、安吾のいう〈墮落〉とはなにか、それを作品読解を通して考えてみたい。

1 作品読解

本作「白痴」に対する代表的な評価にはつぎのようなものがある。

ひたすら霊を追い求めていた作者が、空襲下に肉体と本能だけのせつないかなしい魂を見いだした絶対の孤独を表現している。その大胆な表現は、日本における実存主義、そ

¹ 「デカダン文学論」坂口安吾(『新潮』1946(昭和21)年10月(第43巻第10号))

² 『新・墮落論——我欲と天罰』石原慎太郎(新潮新書、2011)

して戦後文学の出発点となった。かなしみの街を過ぎて、安吾はここから肉体の思考を基調に既成道徳を超えた墮落の中に全人間性の回復を夢見る。³

ここで指摘されている「絶対の孤独」や「日本における実存主義」がどんなものであるか、作品の具体的な描写をもとに考えてみよう。

(1) 芸術と生活という問題に引き裂かれる自意識

「白痴」という作品の視点人物は伊沢という男である。伊沢は27歳で、蒲田の場末の商店街裏町にある仕立屋の離れの小屋を借りて住んでいる。勤め先は文化映画会社で、二百円の月給を貰って演出家見習いとして働いている。

この伊沢は仕事に対して非常に大きな不満を持っている。「新聞記者だの文化映画の演出家などは賤業中の賤業」で、「彼等の心得ているのは時代の流行ということだけで、動く時間に乗遅れまいとすることだけが生活」であった。「彼等の日常の会話の中には会社員だの官吏だの学校の教師に比べて自我だの人間だの個性だの独創だのという言葉が氾濫しすぎているのであったが、それは言葉の上だけの存在」で、「およそ精神の高さもなければ一行の実感すらもない架空の文章に憂身をやつし、映画をつくり、戦争の表現とはそういうものだと思こんでいる」ような人びとと同じ会社で働いている。それゆえ伊沢はなにかにつけ批判的、反抗的なまなざしを自らが属している組織や社会に向けている。

伊沢の述懐として語られている「ある者は軍部の検閲で書きようがないと言うけれども、他に真実の文章の心当たりがあるわけではなく、文章自体の真実や実感検閲などには関係のない存在だ。要するに如何なる時代にもこの連中には内容がなく空虚な自我があるだけだ。流行次第で右から左へどうにでもなり、通俗小説の表現などからお手本を学んで時代の表現だと思こんでいる」というような箇所は、戦時中に軍部に加担した御用作家たちを揶揄しているようにも読める。伊沢の視線は鬱憤晴らしのレベルに留まらず、その奥に「日本二千年の歴史を覆すこの戦争と敗北が果して人間の真実に何の関係があったであろうか。最も内省の稀薄な意志と衆愚の妄動だけによって一国の運命が動いている」という現実を穿つような乾いた冷徹さも持ち合わせている。

伊沢は「芸術の独創を信じ、個性の独自性を諦めることができないので、義理人情の制度の中で安息することができないばかりか、その凡庸さと低俗卑劣な魂を憎まずにいられなかった。彼は徒党の除け者となり、挨拶しても返事もされず、中には睨む者もある。思いきって社長室へ乗込んで、戦争と芸術性の貧困とに理論上の必然性がありますか。それとも軍部の意思ですか、ただ現実を写すだけならカメラと指が二三本あるだけで沢山ですよ。如何なるアングルによって之を裁断し芸術に構成するかという特別な使命のために我々芸術家の存在が——」というような芸術への理想に捧げる情熱に駆られた行動を起こしている。しかし「怒濤の時代に美が何物だい、芸術は無力だ！ ニュースだけが真実なんだ！」と部長に怒鳴られ、「月給がもらえるなら余計なことは考えるな」という顔付で社長に睨まれるばかりである。

³ 「坂口安吾 ——人と作品」奥野健男（『白痴・二流の人』解説、角川文庫、1970）

〈芸術〉という偉大なものに掛ける強い情熱、それゆえに孤高でもあり得る自己、というのが伊沢に与えられたひとつの貌である。しかし、伊沢には相反するもうひとつの貌がある。それが〈生活〉に汲汲とする、貧しく卑しい、卑小な自己である。

それは「伊沢の情熱は死んでいた」と描かれ、「起き上りゲートルをまき煙草を一本ぬきだして火をつける。ああ会社を休むとこの煙草がなくなるのだな、と考える」ような性格のことであり、「彼が会社から貰う二百円ほどの給料で、その給料をいつまで貰うことができるか、明日にもクビになり路頭に迷いはしないかという不安であった。彼は月給を貰う時、同時にクビの宣告を受けはしないかとビクビクし、月給袋を受取ると一月延びた命のために呆れるぐらい幸福感を味うのだが、その卑小さを顧みていつも泣きたくなるのであった」と描写される。

伊沢は「芸術を夢みていた」が「その芸術の前ではただ一粒の塵埃でしかないような二百円の給料がどうして骨身からみつき、生存の根底をゆさぶるような大きな苦悶になるのであろうか」と思い詰めるほど、卑小な存在でもある。その卑しさは「生活の外形のみのことではなくその精神も魂も二百円に限定され、その卑小さを凝視して気も違わずに平然としていることが尚更なさけなくなるばかりであった」とも書かれているとおりである。

〈生活〉におけるこの卑しさ故に、伊沢は女（女房/恋人）を持つことが認められないでいた。自分のことだけでも〈芸術〉と〈生活〉のあいだで自意識が引き裂かれているのに、この上さらに女を持って生活面の煩わしさに囚われることは伊沢には認めがたいことだった。だが、そうでありつつ、卑俗な伊沢は「女が欲しかった。女が欲しいという声は伊沢の最大の希望ですらあった」という欲望を持て余し、孤独に暮らして悶々としているのである。

こうした状況におかれている伊沢にとって、だから戦争には特別な思い入れがあった。それは「戦争、この偉大なる破壊、奇妙奇天烈な公平さでみんな裁かれ」という幻想が、戦時下であるからこそ強烈なリアリティを獲得していることである。伊沢にとって戦争は死の恐怖であると共に、どこかハルマゲドンにも似た、待ち望まれるカタストロフであった。そして戦争と並んでもう一つ恩寵のように登場したのが、卑小な〈生活〉への嫌悪から女への欲望を遠ざけていた伊沢の前に出来たオサヨの存在である。

オサヨは「まるで俺のために造られた悲しい人形のようにではないか」という思いを伊沢に抱かせるほど、白痴であるが故に〈生活〉とは無縁の存在だ。それは「一つの家にな女の肉体がふえたということの外には別でもなければ変ってすらもいなかった。それはまるで嘘のような空々しきで、たしかに彼の身边に、そして彼の精神に、新たな芽生えの唯一本の穂先すら見出すことができない」のだった。「その出来事の異常さをともかく理性的に納得しているというだけで、生活自体に机の置き場所が変わったほどの変化も起きてはいなかった」と伊沢は述懐しているとおりにある。

伊沢が裡に持つ、偉大な〈芸術〉と卑小な〈生活〉という引き裂かれた自意識を慰めたのが、「この偉大なる破壊」と呼ぶ戦争への幻視と、欲望の捌け口であるただの肉体・野生の自然・無意識の存在としての白痴のオサヨである。

(2) 十字路の選択

オサヨは25、6で、伊沢の近所に住む気違いの女房である。オサヨは、出自のいい家柄の

娘のような品のよさがあり、瓜実顔の古風な人形か能面のような美しい顔立ちをしている美人だ。しかし白痴であるため、静かでおとなしく、意味のはっきりしないことを口の中でおどおどと繰り返すことが多い。料理も米を炊くことも知らないのも、およそ生活に役立つような面は描写されてない。

戦争を「偉大な破壊者」として幻視する伊沢と対照的に、オサヨは空襲や爆撃を心底恐怖している。爆撃が始まると「虚空をつかむその絶望の苦悶」を浮かべ、「女の顔と全身にただ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りつ」くのである。

伊沢はオサヨに絶対の孤独を見る——「言葉も叫びも呻きもなく、表情もなかった。伊沢の存在すらも意識してはいなかった。人間ならばかほどの孤独が有り得る筈はない。男と女とただ二人押入にいて、その一方の存在を忘れ果てるということが、人の場合に有り得べき筈はない。人は絶対の孤独というが他の存在を自覚してのみ絶対の孤独も有り得るので、かほどまで盲目的な、無自覚な、絶対の孤独が有り得ようか」。しかしオサヨが見せた「絶対の孤独」は、伊沢には受け入れ難いものであった。なぜなら「それは芋虫の孤独であり、その絶対の孤独の相のあさましさ。心の影の片鱗もない苦悶の相の見るに堪えぬ醜悪さ」だからである。

オサヨは、伊沢の〈生活〉を犯さない都合のいい欲望の対象である反面、爆撃に際しては「見るに堪えぬ醜悪さ」を見せる厭な存在へと簡単に変わる。より正確に言えば、伊沢がこのように自分勝手にオサヨを好いたり嫌ったりして利用している、というのが実際であろう。

作中に描かれる蒲田を大空襲が襲った四月十五日、ついに伊沢とオサヨの暮らしが壊される。二人は火の手が四方に渡るなかを駆け抜け、運命の十字路の前に立つ。十字路の前で伊沢は選択を迫られる。「小さな十字路へきた。流れの全部がここでも一方をめざしているのは矢張りそっちが火の手が最も遠いからだが、その方向には空地も畑もないことを伊沢は知っており、次の米機の焼夷弾が行く手をふさぐとこの道には死の運命があるのみだった」という選択がひとつ。「一方の道は既に両側の家々が燃え狂っているのだが、そこを越すと小川が流れ、小川の流れを数町上ると麦畑へでられることを伊沢は知っていた。その道を駆けぬけて行く一人の影すらもないのだから、伊沢の決意も鈍った」という選択がもうひとつ。伊沢はここで「俺の運をためすのだ。運。まさに、もう残されたのは、一つの運、それを選ぶ決断があるだけだった」として、女と共に「群集の流れに訣別した。猛火の舞い狂う道に向」って「二人は猛火をくぐって走」り、そして生き延びたのだった。

ところが、岐路に立った際の気持ちの高揚や一体感は生き延びたのち一瞬で霧消してしまふ。伊沢は「空一面の火の色で真の暗闇は有り得なかったが、再び生きて見ることを得た暗闇」に、「むしろ得体の知れない大きな疲れと、涯しれぬ虚無とのためにただ放心がひろがる様を見るのみ」だった。「その底に小さな安堵があるのだが、それは変にケチくさい、馬鹿げたものに思われた。何もかも馬鹿馬鹿しくなって」いたという。——この箇所をどう考えるか。

(3) 生き延びたからこそ、墮落できる？

直前の場面から急転直下し、読者は伊沢のオサヨに対する思いも急激に陳腐化してしま

う。ここに、安吾がつねづね語っていた「残酷な〈救い〉のない結末を鑑み、〈生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独〉が〈文学のふるさと〉だと考察し、〈モラルがないといふこと自体がモラル〉というところから文学は出発する」⁴という彼独自の文学的スタンスを看取することもできるだろう。評論「文学のふるさと」のなかで安吾は「私たちはいきなりそこで突き放されて、何か約束が違ったような感じで戸惑いしながら、然し、思わず目を打たれて、プツンとちょん切られた空しい余白に、非常に静かな、しかも透明な、ひとつの切ない「ふるさと」を見ないでしょうか」と提起する。「モラルがないこと、突き放すこと、私はこれを文学の否定的な態度だとは思いません。むしろ、文学の建設的なもの、モラルとか社会性というものは、この「ふるさと」の上に立たなければならないものだと思うものです」と書いている。

伊沢は「この女を捨てる張合いも潔癖も失われているだけだ。微塵の愛情もなかったし、未練もなかったが、捨てるだけの張合いもなかった」という。なにより「生きるための、明日の希望がないからだ。明日の日に、たとえば女の姿を捨てても、どこかの場所に何か希望があるのだろうか。何をたよりに生きるのだろうか」だともいう。荒れ狂う戦火のなかを無我夢中で通過しようとするなかで、とにかく生き延びることそれ自体が目的となる。そして生き長らえたのちには、その茫漠とした寂寥の荒野に立ち、「米軍が上陸し、天地にあらゆる破壊が起り、その戦争の破壊の巨大な愛情が、すべてを裁いてくれるだろう」と、再び戦争の根源的な暴力性を幻視しながら気持ちを慰撫しているかのようである。

ここで「墮落論」を見てみよう。発表順とは異なり、作品内時間としては、「白痴」が戦争末期～終戦一歩手前頃の時空間を描き、「墮落論」は敗戦直後から論が起草される。

「墮落論」では戦争について、「あの偉大な破壊の下では、運命はあったが、墮落はなかった。無心であったが、充滿していた。猛火をくぐって逃げのびてきた人達は、燃えかかっている家のそばに群がって寒さの煖をとっており、同じ火に必死に消火につとめている人々から一尺離れているだけで全然別の世界にいたのであった。偉大な破壊、その驚くべき愛情。偉大な運命、その驚くべき愛情。それに比べれば、敗戦の表情はただの墮落にすぎない」と結論づけられている。

同じく敗戦については、「特攻隊の勇士はただ幻影であるにすぎず、人間の歴史は闇屋となるところから始まるのではないのか。未亡人が使徒たることも幻影にすぎず、新たな面影を宿すところから人間の歴史が始まるのではないのか。そして或は天皇もただ幻影であるにすぎず、ただの人間になるところから真実の天皇の歴史が始まるのかも知れない。／歴史という生き物の巨大さと同様に人間自体も驚くほど巨大だ。生きるという事は実に唯一の不思議である。(略)日本は負け、そして武士道は亡びたが、墮落という真実の母胎によって始めて人間が誕生したのだ。生きよ墮ちよ、その正当な手順の外に、真に人間を救い得る便利な近道が有りうるだろうか」と考察されている。

「文学のふるさと」そして「墮落論 (の戦争観、敗戦観)」を経て、安吾は「白痴」の決末部をこのようにして締めくくった。我々はこの結びをどう受け止めるべきであろうか。

柄谷行人は安吾についてつぎのように肯定的に語っている。

⁴「文学のふるさと」坂口安吾 (『現代文学』1941 (昭和16)年8月号 (第4巻第6号))

たとえばハイデッガーなども「墮落」Verfall ということ——日本語訳では「頹落」——をいっています。しかしハイデッガーの場合は、安吾と逆ですね。人間の本来的なあり方というのは死にかかわる存在である。ところが、日常においては絶えずそこから逃亡している。絶えずそこから逃げている。それが「墮落」である、ということになっています。むしろそれは理解されやすい、ありふれた言い方でして、安吾はハイデッガーとは逆に、本来的なあり方に向かうことを「墮落」と読んでいるのです。したがって「墮落論」というのは、ものすごく倫理的な本です。見かけの上では、つまり道徳的に見れば、それは墮落に見えるだろう。しかし、それは倫理＝反倫理（モラル＝インモラル）という意味でそうなのではありません。いわば、アモラル（非倫理）なのですね。それはおそらくインモラルに見えるでしょうが、やむをえない。そういう意味で安吾は「墮落」という言葉を発明したのだと思います。⁵

安吾が「墮落」や〈生きよ。墮ちよ。〉というとき、そこには既知の「墮落」とは異なる意味づけがなされている。その意味づけし直し＝再定義こそ、敗戦後の焼け跡に新生の思想の楔を打つ原動力だったのではないだろうか。そしてそうした再定義を本能的に行ってきた熱量こと、安吾が時代の寵児となったゆえんの一端なのだろう。

安吾の「墮落」、意味づけをし直す強靱な精神と直観が、時代をくだってどう継承されていくのか、それを次回以降見ていきたい。そこではまた異なる「偉大なる破壊者」との遭遇、格闘、そして墮落が描かれることになるだろう。

2 「白痴」の評価

福田恆存は『白痴』に見られる男女間の愛情について、安吾は「精神と肉体との対立」という旧来の主題を追求しているが、安吾は男女間の付き合いを「肉体的なもの」だと断定しているわけではなく、「そうではないかと間を發しているまでのこと」で、「かれは処世術をぶちこわしてみたいのである」と考察し、男女間の「精神と肉体との対立」に妥協して、うやむやに穏便に事を進めるという処世術、妥協から生まれる「無意識」というものに福田は言及しながら、「坂口安吾は無意識の虚を突き、妥協の安定をくつがえすのである。なんのために——精神の純粹熾烈な發光に陶醉したいという、その一事のために。坂口安吾は度しがたい夢想家なのだ」と解説している。そして福田は、安吾の精神はもともと「現実と観念」の間に安定を欠いていたために、「処世術の虚偽」を見抜いたのであり、処世術の否定により、安定を欠いたのではないとし、そういった事実を安吾が「自己の宿命として自覚」したからには、次に「逆の運動も可能」となり、それにより安吾の精神はますます安定を欠いてしまうのだと論考している。⁶

⁵ 柄谷行人「安吾その可能性の中心」（『坂口安吾と中上健次』講談社文芸文庫、2006）

⁶ 福田恆存「解説」（『白痴』解説、新潮文庫、1949）

宮元淳一は『白痴』の構成について、「偉大なる破壊」の戦火により人々は「焼鳥のやうに」死んでゆくという異常な状況下における主人公が、そこに「運命に従順な美しさ」を感じてしまうが、その「美」を寸前のところで思い留まり拒絶して、「平凡」に生きることを決意すると概説している。そして、伊沢が女に、「俺の肩にすがりついてくるがいい。わかったね」と言う場面が『白痴』のハイライトであり、その決意の一瞬は極めてヒロイックであるが、その場面に反し、戦火という「デモーニッシュ」な美をくぐり抜け、小川へたどり着いた二人には、「勇壮な面影」はなく、豚のような軀をかいて眠る女の横の伊沢は凡夫となり、「戦争という“偉大なる破壊”に身を任せること」を拒絶したことにより、安月給に汲々とするような「卑小な生活」が再来する」とし、「それこそが伊沢の選んだ道なのであり、彼は正しく“墮落”という“驚くべき平凡さ”を正面から引き受けているのである」と解説し、『白痴』がエッセイ『墮落論』の主題と呼応していることを論考している。⁷

3 先行研究による「安吾」の評価

敗戦（そして戦争）は日本人にとっては一つの運命のような大事件であった。大事件というものは、浅薄な人にはお喋りをもたらし、深刻な精神には沈黙を強いる。たとえば「墮落論」にただ一人名前の引用される小林秀雄は、敗戦という事件については、ほとんど徹底して沈黙を守った。その一方、いつも時を得た顔の知識人達は、興奮して途方もないお喋りに熱中していた。

そんなときに、安吾は、一個人の正直な感想とっていいまったく人間的な声を、大事件に与えたのだ。彼の声は、知識人による火事場の馬鹿騒ぎではなかった。昨日家を焼け出された者の語る、普通の人間の普通の声であった。

一人の普通の人間の声である。敗戦に呆然としている日本人の大多数も、心の裡では何かこんなふう感じていたに違いない。しかし、それは声にはならなかった。声となって発するためには、安吾という、一個の三文文士の痛烈な魂が必要だった。変なたとえになるが、その五、六年後、水泳日本の古橋が次々に世界記録を書き換え、沈んでいた日本人の胸に誇りの火を点け頭をもたげさせたが、何かそのようなことを、安吾もしたのだ。彼は、火になろうとした。そのために自分の身をボロ布のように使い果たそうとした。

逆説的なことだが、このときの安吾は、今日のいわゆる偉い文学者でもなければ有名作家でもなかった。では、どういう存在か？ 私はこんなふうに言うのがいいと思う——彼は、一個の痛快な「男子」であった、と。彼は大事件のなかを、ただ一個の男として生きたのだ、と。私が好きな話だが、ストア派の哲学者エピクテートの『人生談義』の中に、皇帝から髯を切れといわれたのに切らないので死を命ぜられたオリンピックの競技者が実に従容として死んでいく、それについてエピクテートが、彼はなぜ死んでいくのか、と弟子達に問

⁷ 宮元淳一「坂口安吾の自家撞着——『ふるさと』と『墮落』について」
（日本研究 Vol.19 2006年3月15日掲載）

い——彼は一個の「男」として死んでいくのだよ、と教える場面があるが、私は何かそんな「男」を安吾に見る。

すると、こんどは本当の逆説がやってくる。なぜならこの「墮落論」の時期から坂口安吾の文学が猛烈に開花するわけだが、それは安吾が、いわゆる「文学者」などという生の態度を捨て、一個の男に、一人の普通の人間になり切ることによって生じたからである。

こういう逆説を生きるのが、彼の精神の発条であり、彼の生の主張であった。そのことは、まことに人間的な対決——「教祖の文学 - 小林秀雄論」にはっきり読み取れる。

むろん、こういう逆説へと至るのが、安吾の文学の行為であり、その道程だった。そこに、安吾の文学の秘密というか魅力が隠されているように、私は思う。

(略)

「白痴」は、空襲下の現実を描いて、戦後文学のなかでもっとも見事なものだ。この現実には生きて動いている。そして、白痴の女を手掛かりに、いわば人間の生存の原型とでもいうべきものが露呈される。⁸

多くの論者が指摘するように、坂口安吾の文学上のテーマは、形而上の世界と形而下の世界との相克にある。すなわち、坂口安吾の生涯賭けての文学的努力は、自己の内なる宗教的形而上の世界を、禁欲的自虐的に清算するという課題の上に傾けられていた。だが、この「文学のふるさと」では、安吾の宗教的形而上的な資質が、いつになく自然に流露しており美しい文章になっている。それは、人間の日々の営為が、いつ狼や鬼のパックリと開いた口に呑み込まれてしまうか分からないという当時の人々の、時代に対する危機意識を反映しているためかも知れない。なお、この文学論に基づく作品としては、孤独者の凄絶な生き方を描いた説話「紫大納言」および「桜の森の満開の下」を典型的なものとおして挙げるができる。⁹



⁸ 「「戦後」を駆け抜けた男——坂口安吾・人と作品」 秋山駿 (『昭和文学全集』第12巻、小学館、1987)

⁹ 「安吾の資質と安吾の課題」 黒田征 (『新研究資料 現代日本文学』第4巻、明治書院、2000)